
デジモンワールド Re:ミラクルディステイニー realize 修学旅行編
たく☆マル

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジモンワールド Re：ミラクルディステイニー realize
e 修学旅行編

【作者名】

たく☆マル

【あらすじ】

この物語は本編デジモンワールドRe：ミラクルディステイニー
Realizeの本編とはなんの切片のない番外編です。スピノフみたいなもの

本篇より先にネタバレなどを含むためご注意ください。

実際この作品はファクション（フィクション）とノンフィクション（現実）の中間に位置するものです。実際の地名、名前、

団体等を使用している部分は少ないですがあります。内容はほぼほぼ再現させてあります。

ここは、RWリアルワールドで起きた少しだけ普通じゃない修学旅行。

この修学旅行は1月31日～2月3日の3泊4日の修学旅行で学校行事での最大のイベント。

これはリアルで体験した主の物語タクミ・・・

Re:メモリー「出発できない!?奇襲されし修学旅行!」p
art1.

目覚まし時計の音がする。いつもより音が大きく耳に良く響いてくる。

タクミ「ん・・・ん''ん''」

目覚まし時計を見ると早朝の4時を指しており「ジリリリ」とアラームが鳴り響く。

タクミ（流石に眠いし・・・あと五分だけ・・・）

アカリ「おっきろおおお!!!今日は修学旅行でしょ!!!二度寝なんかダメダメ!!!しっかり起きて、歯も磨いて、朝食食べて、出発よオオ!!!」

アカリ先生がいつもより大きな声で僕を起こしにやって来る。

タクミ「あと、あと5分だけ。。。」

二度寝しようとした僕。だが先生はそれを許すはずもなく・・・

アカリ「そろそろ、起きなわ（沖縄）!!!」

タクミ「・・・サブウ!?ああ・・・目が覚めたよ・・・今のでき

・・・」

寒かった。二度寝をしようとした僕も悪かったが流石にそのギャグは寒すぎる。

タクミ「はいはい。。。起きますにゃく。」

いやいやだが起きるしかあるまい。

全く、なんで早朝の時間帯が集合時間になっていることやら・・・

く登校中く

空はまだ暗く、星や月が綺麗に見える。冬の星空となるとかに座やしし座、あとはオリオン座などが綺麗に見えたりする。

辺りは雪に覆われていていつのも朝日ヶ丘エリアがまるで別の世界に生まれ変わったような雰囲気になる。

アカリ「しっかし・・・寒いねえ。」

それもそのはず。朝の気温は-4℃とか意味不明な気温を表示していたもの。

タクミ「ホント寒いですよえ・・・まるで冷蔵庫のよう。」

イグドラシル「表現的には合っているかもしれないがこの朝日ヶ丘エリアだけが劇的に気温が低くなっている。これは。その、デジモ

ンの活性化が原因なのかもしれない。」

アカリ先生のパートナーのイグドラシルが言う。

イグドラシルはDW（デジタルワールド）の化身的な存在で、異常なことなどを瞬時に判別することが可能だ。

タクミ「活性化……。ユキダルモンとかそのへんですか？」

イグドラシル「だな、確信はつけられないが……。アカリ、原因を突き止めて解決するぞ。」

アカリ「せめて、学校に送り届けてからにしないと動けませんわ（
^ ^ ;）」

この二人に任せておいても大丈夫なのか……。そう思いつつ学校に登校した。

Re:メモリー1 「出発できない!?奇襲されし修学旅行!」 p
art2.

〜RW(リアルワールド) 朝日ヶ丘学園〜

朝日ヶ丘学園についた時にはかれこれ修学旅行に行く生徒だけで部屋が埋まりそうになっていた。

クラスの担任などを含めて総勢100名近くはいるのだろう。

タクミ「なんとか・・・間に合いましたね。」

僕は急いで集合場所に向かって走っていった。

集合場所には一緒にクラス班のメンバーたちが全員いた。

《僕の班は5人版でいつものタイキとイナズマさん。そこにイナズマさんのお友達のめぐみさん(通称めぐみん)とタイキの友達のカズマ(通称カズカズとかいろいろあるらしい。)と一緒にだ。》
めぐみん「あっ、やっと来ましたね!待ってましたよ。」

赤い髪、赤いメガネをかけたいかにも熱血少女みたいな少女。それがめぐみんだ。

しかし、めぐみんは人前ではおとなしいので仲がいい人たち以外の前では素の自分を出すことがない。

カズマ「おっ、なあんだ。タクミさんじゃないか!いつもよりギリギリで心配したじゃねえか!」

茶色い髪をしていて緑の服が似合うカズマさん。人よりか頭の回転が速く特に人のためや自分のためになることには速攻で思いつくためあたりからは「天才」の異名を持つ。

しかし。その裏腹にかなり腹黒くなることもあるため「クズマ」とか「カスマ」とか言われる時もある。

タクミ「そこまでギリギリじゃありませんよ。それよりかタイキとイナズマさんは？」

カズマ「えっとお。タイキは今登校してる最中でイナズマさんは……」

カズマが声をかけた瞬間に僕の後ろから突然空気が避けるような感覚が襲った。

タクミ「!?!?ちょ、ちょおお!!?!?危ないなあ。。。イナズマさん……(。D。)ノ」

イナズマ「あははあ……めんご、めんご。カバンが重たくってねえww」

イナズマさんのカバンは旅行用の鞆と通学とかに使っているカバンとあるが、それともう一つ。

パンパンに中身が詰まったりリュックサックが僕の目の前に置かれていた。

めぐみん「これ……一体なんなのよ？」

イナズマ「ん?なになって、お菓子だよ!それ以外の必需品はケースの中だったりだから安心して!」

カズマ　タクミ「いや!!お菓子だけがそこに詰まっているのかよ!?!?」
思った以上に答えが斜め上にあっただからついツッコミが先に
出てしまった。

改めてリュックサックを見てみるとスナック菓子や洋菓子などが詰め込まれている。

タクミ「うわぁ……流石に多すぎじゃないかこれ……?」

カズマ「確かにこれは……多いと思うぞ。」

僕たちはそう言ってカズマはポテトチップスに、僕はソフトキャンディをいただいた。

めぐみん（そう言いながら食べるんですね）

数十分くらい経っただろうか……。集合時間がちがづいてくるも
未だにタイキの姿が見られない。

カズマ「それにしてもタイキのやつ……。遅すぎねえか？」

めぐみん「確かに！何かあったんじゃないんですか？」

めぐみんが言葉を出した途端、学校の裏にある山から「ドオオオオ
ン！！」と言う轟音が空に響き渡った。

イナズマ「！？一体何事！！」

山の方に視線をよると瞳の色が赤く染まったユキダルモンたちが学
校に向かってくることがわかる。

「ユキダルモンが来るぞおお！！」「キャー！！まだ高校生なのに
い……。！」

あたりからは悲鳴などがこみ上げて生徒たちは皆バスへと駆け込む。

イナズマ「メイクーモン……。数、どれくらいいるかわかる？」

メイクーモン「……。ざっと50？いや、60いるのかも……」

ひと目では数なんてはつきりするわけもない。ただ、やらねければ
ならないことは……

イナズマ「修学旅行の邪魔されてなりますかあ！！行くわよ！！み
んな！！！」

イナズマさんの合図とともに僕たちは戦闘態勢を整えた。

数十匹のユキダルモンが押し寄せてくる修学旅行なんて誰が思っ
ていたことやら……。

そう呆れつつ戦いを始めた。

最初に動き出したのはめぐみんだった。

めぐみん「realize!!ピヨモン!!」

めぐみんはパートナーデジモンのピヨモンをリアライズし、そのまま究極体であるハウオウモンまで究極進化させた。

タクミ「最初から飛ばしますねえ・・・」

めぐみん「さあっ、修学旅行の出発を妨げるおいたちゃんはどこかなあ・・・(・v・)」

そう言うとパートナーデジモンであるハウオウモンが何かをつぶやきだし周りに大きな火の玉が現れ周囲を回り始めた。

ハウオウモン「我が煌く炎に、爆ぜろ!!スターライトエクスプロージョン!!」

ハウオウモンの十八番である必殺技だ。たちまち辺りに轟音が響き渡り周りの雪が少しだけが溶け切った。

めぐみん「フュー!!さっすがハウオウモン!!ド派手な花火だった!!」

次に僕とカズマが動き始めた。

修学旅行中は僕のパートナーであるブイモンは姿を見せない、ロイヤルナイトの緊急会議があるそうだ。

なので僕は説得を試みた。

タクミ「こっ、これ以上来るなら怪我するよ・・・」

説得を試みたがユキダルモンは聞く耳を持たず、進行してくる。

カズマ「こりゃ・・・一発ぶん殴って正気に戻すしかねえなあ・・・」

タクミ「ぶん殴るって・・・デジモンに喧嘩を売ることですか!？」

少々カズマの言動に動揺した。っと言うか引いてしまったと言った方が正しいか・・・

しかし、その方が効率もよく、肉体言語という言葉のあるし・・・別に

いいよね？

カズマ「どりゃああっあ！！！！」

カズマの拳が急所にあたり、5、6体くらいのユキダルモンが転んでいった。

タクミ「おおー。すごい、ていうか僕には殴るなんて無理だよお（
^ ˘ ; ）」

随分逃げ回ったが、突然ユキダルモンは足を止めこう語りかけてきた。

ユキダルモン「合格！！！君たちはどんな困難にも乗り越えられるほどの力を持ったティーマーたちだね。それじゃ、気をつけて行ってらっしゃい！！！！」

こう告げるとただただ戦えたことに満足しているのかしていないのかは分からないが楽しそうに帰って行った。

タクミ「。。。ただただ遊びたかっただけかあああああ！！！！」

数分後

タイキ「いやぁーギリギリセーフ…」

ギルモン「タイキ：5分前にはバスに乗り込まなきゃだよ…」

そのあと、タイキが見たのは疲れ果てていた僕たちには4人と少ししかめっ面の先生。そこに朝早くで寝てしまっている生徒たちがいたそうなの。

Re：メモリー 1 Fin.

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~22973

デジモンワールド Re:ミラクルディスティニー realiz
e 修学旅行編
2019年12月01日 10時00分発行